

シンポジウム／鬼と山人―『津軽口碑集』を基点として―

昔話の中の鬼

佐々木 達司

1、青森県初期の昔話調査

まず、『津軽口碑集』が出版された、昭和初期の青森県の状況について述べる。

大正九年（一九二〇）、千葉県の医師、内田邦彦が五所川原町に移住し、診療のかたわら口承文芸の調査をした。その成果が昭和四年に郷土研究社から『津軽口碑集』として出版された⁽¹⁾。同書に鬼と山人の記述が多いわけではないが、最初の調査記録であり、精度の高い資料という点で注目したい。

昭和三年（一九二八）、東奥日報社が『懸賞民話伝説』を募集し、入選作の連載を始めた。同五年、一等入選の川合勇太郎が、これらの入選作や『津軽口碑集』の一部を書き直し、『津軽むかしこ集』として出版した⁽²⁾。

昭和四年に奥南新報が、聞いたままの報告を求めた「村の話」の連載を開始、同十六年、戦争で新聞統合（実質廃刊）になる

まで一〇三三回続いた⁽³⁾。昭和十一年、柳田国男がこの中の昔話を分類して、雑誌『昔話研究』に「八戸地方の昔話」を連載した⁽⁴⁾。これは柳田の話型研究の基礎になったと考えられる。

中道等・中市謙三・小井川潤次郎・夏堀謹二郎・能田多代子といった民俗研究に関わった人たちが、雑誌に昔話を発表し、尋常小学校や女学校などで生徒を介した昔話の間接採集が行われた。竹内長雄・小井川潤次郎、小井川静夫が生徒に昔話を宿題として課したことが知られている。

青森県は、南部・下北・津軽の三つの文化圏に分かれる。それぞれ歴史や気候風土も異なる。昔話の結句も、南部が「どつとはれ」、津軽は「とつちばれ」であるのに対して、下北は両者が混在するほか「一生暮らした」系の結句が多い。こうした地域差を念頭におきながら、見ていきたい。

2、鬼神信仰に重なる鬼のイメージ

イメージは昔話の重要な要素である。犬や猫、蛇といった日ごろ見なれた動物でも、昔話の中では異なったイメージで語られ、聞き手はそれを当然の事として受けとめている。鬼のような架空の存在については、どのように語られるであろうか。語り手の聞き手の間で共有する鬼のイメージを、「食わず女房」と「瓜姫」から探ってみたい。

「食わず女房」には、A 蛇女房型、B くも女房型があるが、

青森ではほとんどが蛇女房型で、しかも正体が鬼に変わるとい
う傾向がみられる。

また、「瓜姫」には主人公が幸福な結婚に至る西日本型と、
残虐な死をとげる東日本型がある。しかし、日本海側の津軽に
は西日本型が多くみられ、しかもアマノジャクは残虐な殺人者
としてではなく、いたずら坊主のイメージで捉えられている。

語り手は、「鬼でも自分の女房だった、残った舌を笹餅とし
て作るようになった」、「鬼神を信心しているので、節供にも菖
蒲・蓬を挿さない」などと、鬼の側に寄りそった心情で語る。

こうした鬼のイメージを支えている要素は複雑であるが、こ
の地方の鬼神信仰も一因と考えられる。岩木山周辺には、鬼に
ついての伝承とそれに関わる社寺がある。水田開拓を助けた鬼
を祀る鬼神社のある弘前市鬼沢では、節分に豆を撒かず、五月
節供にも菖蒲・蓬を飾らない。

また、鳥居に鬼コと呼ばれる像を掲げる神社が岩木川流域に
点在する。それは小さく愛嬌のある風貌をしており、なかには
角のないものもある。これら伝承の鬼は、昔話の鬼のイメージ
とも重なる。

3、蛇が鬼に変わる「食わず女房」

青森県の「食わず女房」の採集例は五六話ある。この話には、
A 蛇女房型と、B くも女房型がある。正体がくもという例も

六話見られるが、くも女房型の、くもが自在鉤を伝って下りて
くるというモチーフを欠き、蛇女房型の蛇がくもに変わる。

蛇女房型とはいうものの蛇がわずか六話、一一パーセントに
過ぎない。東北では蛇が鬼に変わる例がみられるが、青森では
特にその比率が高く、六六パーセントを占める。鬼・鬼婆・山姥・
山姥・山男と呼ばれる。また、結末で五月節供の菖蒲・蓬の由
来を語るものが四八パーセントある。

食わず女房が正体を現さず、最後まで嫁とだけ表現される話
も六話、一一パーセントあるが、これは鬼に対する畏怖感が希
薄になったためと考えられる。

また、津軽にだけ、蛙・鯉・鳥といった動物も登場するが、
その理由は分からない。

食わず女房の正体

	正体	全県	南部	下北	津軽
鬼	三七話	一三話	一〇話	一三話	
蛇	六話	一話	二話	三話	
嫁	六話	〇話	四話	二話	
くも	四話	二話	一話	一話	
動物	四話	〇話	〇話	四話	
計	五六話	一六話	一七話	二二話	
鬼の比率	66%	81%	59%	59%	

5、西日本型の「瓜姫」が津軽に

「瓜姫」には、東日本型と西日本型の二つのタイプがある。アマノジャクが瓜姫を殺してその皮をかぶるといふ東日本型に対し、西日本型は瓜姫が最後には助けられ幸福な結婚に至るといふ構成になっている。

分布を見ると、幸福な結婚に至る割合が、南部で八パーセント、下北で一三パーセントであるのに対し、津軽は五〇パーセントを占めている。津軽に限らず秋田県の日本海側にもこうした傾向が見られ、陸路を伝播したものと別海路をたどったものがあるためと考えられる。

川に流れてきた瓜からの誕生が二八パーセント、畑の瓜からの誕生が二二パーセントで、異常誕生のモチーフを欠くものが五〇パーセントを占める。敵対者のアマノジャクは鬼の仲間であり、九三パーセントと圧倒的だが、猿・狐が各一話ある。

「瓜姫」が結婚に至る割合

運命	全県	南部	下北	津軽
結婚	一一話	二話	二話	七話
死	三七話	一八話	一三話	六話
なし	六話	五話	〇話	一話
計	五四話	二五話	一五話	一四話
結婚の比率	20%	8%	13%	50%

6、鬼を祀る社寺と鳥居の鬼コ

岩木山の周辺には、鬼に関係のある社寺が点在する。

鬼を祀る弘前市鬼沢の鬼神社

もと鬼神社があつた弘前市十腰内の巖鬼山神社

その近くには鬼神太夫という刀鍛冶の伝説

鬼沢村から移転した弘前市西茂森の赤倉山宝泉院

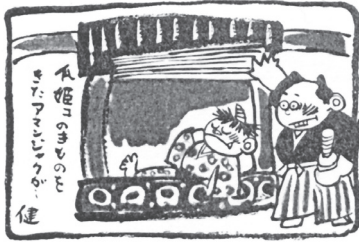
老鬼女が棲んでいたという弘前市百沢の赤倉霊場

民家の宅地に建つ鱒ヶ沢町建石の鬼神神社

中道等『津軽旧事談』から、要点を引用する。⁽⁵⁾ (新漢字、現代かなづかいに変更、以下同じ)

……赤倉と申す処には、恐しい大人が棲むと、かなり古くから言い伝えられた。此の大人は名を出錫杖と言ひ、例の前鬼後鬼にも似た二人と言ふ事になつて居る。……中津軽郡鬼沢村では、此の山人と馴染んだ男を弥十郎と申した。鬼沢村が往古長根派^{はたち}と言つた時、件の弥十郎大人と知合になり、相共に新里を開墾したが、其の時使用した鍬が村の藤里喜三郎と言ふ人に伝わり、又大人の蓑笠は祠堂の中に納めたと、あの土地の人々の話であつた。……但しこの鍬は三尺位はあつたと、寛政の初年に鬼の宮開帳の節実見した練屋白龍が書いて居る。鬼の宮は鬼沢村の産神であつて、鬼を祀るところから此の界限では大きな仕事の話が絶えぬ。……大昔、中津軽郡裾野村

鬼の鬼メージ



画家が描いたアマノジャク
藤田健次「西北ののむがしコ」から



鳥居の鬼コ 弘前市種市 熊野宮



鳥居の鬼コ 弘前市中崎 月夜見神社

字十腰内に、鬼神太夫と言う強力無双の刀鍛冶があつた。或時十振の剣を打出して自ら名剣也と慢じて居た。すると其の内一振飛び上つて一樹の杉の梢に懸り輝きわたる。里人是れを神と崇めたが、十腰無いと言うので臣名を十腰内と呼んだ。これらの社寺やその信徒は、今でも五月節供に菖蒲・蓬を差さず、節分に豆撒きをしないと云っている。『津軽俗説選』には、次のようにある。⁽⁶⁾

赤倉山宝泉院にては節分に豆を打たず……宝泉院は鬼沢村より引移りて世に鬼沢寺という、此鬼沢一郷鎮守鬼なる故に、五月菖蒲を葺かず、除夜に豆を打たず、此例なるべし、また津軽平野には、鳥居に鬼の像を掲げる神社が散在する。弘前市・平川市・板柳町・鶴田町・五所川原市・つがる市・中泊町など、岩木川およびその支流域に三八体が確認されている。これ

らは「鳥居の鬼コ」と呼ばれ、怖い鬼ではなく親しみのある存在である。津軽では可愛らしいものに「コ」をつけて呼ぶ。花コ、わらしコなどというように、鬼コは可愛らしい鬼といった形容になる。

アマノジャクも鬼の一種であるが、津軽ではいたずら小僧のようなイメージがある。挿絵は津軽で生まれ昔話を聞いて育った画家が、自分のイメージで描いたものである。鳥居の鬼コにはさまざまな形態があるが、写真の鬼コはユーモラスで可愛らしい鬼である。こうした鬼神信仰が背景にあつて、昔話の鬼のイメージを形成している。鬼コが飾られるようになった理由はわからない。

鳥居の鬼コについては、福士寿一「津軽の鳥居の鬼コの背景」が詳しい。⁽⁷⁾

もつとも古いとされる弘前市撫牛子の八幡宮の場合、最初の像は藩政時代に甲冑師であった高山玄南の作で、角がなかったと伝えられる。菅江真澄もこれら神社のある地域を旅しているが、鳥居の鬼コに触れていないことから、福士は「真澄の時代にはなかったのではないか。以前に祠にあった鬼像が、明治になってから鳥居が建立されたときに飾られた」と推察している。また、「撫牛子の鬼コに角コ無エ、西郷隆盛首つたコ無エ」とか、「大高源吾に鼻コない、ないじよしの鬼コに 角コ無い」というわらべうたも伝えられている。

現在、確認されている三八体のうち、揭示時期が判明するもの二九体である。明治期に七体、大正期に一八体、昭和に入ってから四体である。昭和三十五年左右に作られたという弘前市三和の日吉神社のものもつとも新しい。

大湯卓二は「青森の鬼」の中で、次のように述べている。⁽⁵⁾
鬼コが津軽平野一帯に分布し、その他の地域に見られないということからこの鬼コの伝播は、もともとこの地域に伝承母胎があつたと考えられる。その背景として、鬼コを飾る地域が、岩木山を中心とする山岳信仰圏のなかにあり、それに伴う守護的性格をもつ鬼伝説の伝承圏とも重なっている点が注視される。このように鳥居の鬼コは明治期から大正期にかけて広まつたとみられる。この背景には、鬼神信仰がある。青森県の昔話に見られる鬼のイメージは、こうした背景があつて形成されたと考えられる。

注

- (1) 内田邦彦『津軽口碑集』郷土研究社 一九二九年。復刻版は歴史図書社 一九七九年刊行。『日本民俗誌大系』第九巻、角川書店 一九七五年にも収載。
- (2) 川合勇太郎『津軽むがしこ集』東奥日報社 一九三〇年、復刻版は津軽書房 一九七三年刊行。
- (3) 「村の話」は八戸市の奥南新報に掲載。『奥南新報「村の話」集成（上・下）』として青森県が一九九八年刊行。
- (4) 「八戸地方の昔話」は柳田国男が雑誌「昔話研究」（壬生書院）第二巻第二号から十二号まで連載（第五号休載）。
- (5) 中道等『津軽旧事談』炉辺叢書 郷土研究社 一九二五年刊行。一ページ。
- (6) 練屋、工藤白龍は弘前の人、『津軽俗説選』五冊は寛政九年に成る。活字本は青森県学校図書館協議会が一九五一年刊行。一七二ページ。
- (7) 福士壽一「津軽の鳥居の鬼コの背景」とくに役行者（観音）と毘沙門天（鬼）との関連において―（『地域学』四巻、弘前学院大学 二〇〇六年刊行。七七ページ）。
- (8) 大湯卓二「青森の鬼」（『東北の鬼』所収）岩手出版 一九八九年刊行。六四ページ。

付記

本稿はシンポジウムでの発表に加筆したものである。

(c) 青森県民俗の会